

SPECIAL REPORT

認知症患者の 穏やかな日々を支える。

認知症看護特集

認知症への理解、患者への理解を深めて
 入院生活を手厚くサポートする。



CHAPTER 01
**認知症患者が抱える
 課題を解決するために。**

「野球、始まりますよ」。そんな看護師の
 声に促され、みよし市民病院のデイルーム
 にやってきたのは、2階の1病棟（一般病
 棟）に入院している患者である。画面をじっ
 と見つめ、鼻肩の選手がヒットを飛ばすと、
 うれしそうに目を細めた。この患者は循環
 器疾患で入院したが、入院後まもなく、認
 知機能が急速に悪化。夜になると、「家に
 帰る」と徘徊するようになった。「何とか楽
 しい気持ちになつていただけませんか」。対策
 に取り組んだのは、認知症看護認定看護
 師の日浦麻喜である。「ご家族から野球観
 戦が趣味だと聞き出し、毎日テレビ観戦に
 誘うようになりました。それからは表情も穏
 やかになり、よく眠れるようになりました」
 と、ほほえむ。

もう一人、3階の3病棟（療養病棟）で
 認知症看護を進めるのは、同じく認知症
 看護認定看護師の近藤千春である。「最
 近うれしかったこと」として、次のような話
 を教えてくれた。「その患者さんは認知症
 のため、食事をほとんど召し上がりませ
 ませんでした。そこで、ご家族に好物を持っ
 てきていただいたり、おやつ時間を設けるなど、
 根気よく食事を増やす努力を続けまし
 た。その結果、数カ月して1日3食おいし
 く食べられるようになり、最終的には施設
 に入居することが決まったんです。在宅へ

CHAPTER 02
**病棟から外来へ
 認知症看護を広げたい。**

日浦と近藤が認知症看護認定看護師
 の教育機関に通い、資格を取得したのは、
 令和2年のこと。どうして、一念発起して
 入学を決意したのか。「この10年で認知症
 の患者さんがかなり増え、対応に困って
 いました。もっと専門的な知識を身につけ
 るば、薬や行動抑制に頼らず、穏やかな入
 院生活を過ごしていただけるのではないかと
 考えたのです」と日浦。それに続いて、近藤
 も次のように話す。「軽い認知症だった人
 が入院中に症状が悪化し、家に帰れなく
 なってしまう。そんなケースを数多く見て、
 悔しい思いをしていました。もっと認知症を
 理解して、私たちみんなが偏見を持たずに
 看護、介護すれば、在宅へ戻る道を作れる
 のではないかと考えました」。

約1年間の勉強で、2人は認知症の心
 理状態や問題行動の原因などを科学的に
 学び、患者への適切なケアをマスターした。

繋ぐことができ、本当にうれしかったで
 すね」。

「これらは、同院の入院患者に対する認知
 症看護の成功事例の一つ。同院では今、こ
 の2人が中心となり、病棟全体で認知症
 看護に力を注いでいる。たとえば、オムツ外
 しを防ぐためのつなぎ服（上衣と下衣が一
 体の介護衣）を、日中は使わないようにな
 ったことも、大きな収穫だ。「つなぎ服は首元
 も窮屈で、着心地はよくありません。それ
 はわかってはいるのですが、すぐオムツを触
 ってしまう患者さんに対しては、どうしても
 使わざるを得ない状況でした。でも、こまめ
 にトイレ介助などを工夫すれば大丈夫だ
 とスタッフに伝え、つなぎ服に頼らない看護
 を実践するようになりました。最初は抵抗
 感のあったスタッフも、今はやればできると
 実感していると思います」と、日浦は話す。

COLUMN

● 高齢化とともに、認知症になる人
 の割合が増えており、今や85歳以上
 の4人に1人が認知症であるという。
 ● 認知症は、脳細胞の死滅や活動の
 低下により、認知機能に障害が起き
 る病気。認知症が進行すると、理解
 力や判断力が低下し、日常生活・社
 会生活に支障をきたす。認知症を完
 全に治す治療法はまだない。だからこ
 そ、病状の進行を遅らせ、生活の質
 を保つために、看護師の専門的なケ
 アが非常に重要な役割を担っている。

今は、その専門知識を、病棟看護師たちへ
 と広げている最中だ。「まずは、もっと院内
 に認知症看護を普及させていきたいと考
 えています。今はコロナ禍で大規模な勉強
 会もままありませんが、いろいろな機会を
 とらえて、全員がより良いケアを実践でき
 るようにしていきたいですね（近藤）。さら
 に、いずれは病棟だけでなく、外来にも関
 わっていくという目標を持つ。「たとえば、
 自宅に帰った認知症患者さんについて、相
 談を受けることもありますが、今のところ
 介入できていません。いずれは、入院から在
 宅までずっと相談にのっていきけるようなシ
 ステムを作っていきたいと考えています」と
 日浦は意欲を語る。

高齢者の多くが在宅で療養する時代、
 認知症看護は地域に必要不可欠な専門
 知識になりつつある。認知症看護に精通し
 た看護師が中心となり、入院治療から在
 宅までを見渡し、認知症の人とその家族
 を支えていく。その体制づくりは今、始まっ
 たばかりだ。

BACKSTAGE

在宅に近い病院で
 展開される看護の最先端。

● 医療も看護も最先端をめざし
 て、日々進化している。最先端の
 医療が展開されるのは主に高度
 急性期病院だが、認知症看護の
 ような、時代が求める最先端の看護
 が必要なのは、みよし市民病院
 のような在宅に近い病院ではな
 いだろうか。

● 専門的な知識を持って、認知
 症患者の気持ちを理解し、心穏
 やかに過ごせるように支援する。
 そのノウハウの蓄積が、地域で暮
 らす高齢者の生活の質の底上げ
 に繋がっていくはずだ。

